第 2012-01 号

恵みと真理のニュース

2012 年 1 月の一次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養 5 洞 458-5 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］　試練を通じ、揺るがない信仰を与えてくださりありがとうございます。

私は小学生の時、友達に進められて教会に通うようになりました。
20代半ばの頃、私が蓄えた資金で兄と一緒に事業を始めました。しかし、利益配分の問題でもめることになり、兄との溝は深まる一方でした。心に傷を負った私は誰も信じられなくなり、心身とも弱くなっていきました。
私が唯一頼れるお方はただ一人、神様だけでした。それまでのいい加減だった信仰生活を悔悟して、真実な態度で礼拝を捧げ、何事にも神様を褒めたたえるようになりました。家族や周りの人はそんな私をおかしく思い、教会に通うことを反対しました。私は周りの反対を押し切って、信仰の回復と様々な願いのために100日間、夜明け祈祷を捧げました。ところが、100日間の祈祷にも関わらず、神様は私の願いの一つであった配偶者に対する祈祷に答えを与えてくださらなかったのです。
私は、期間を決めてお祈りをささげても、期限内に応答がない場合どうすればいいのか、牧師様に尋ねました。牧師様は神様が答えてくださるまで、祈り続けるようにと仰いました。私は、その言葉に従い、祈りつつけることにしました。それから20日が経った時、私の祈る姿を見守っていたある執事さんの紹介で今の妻と出会い、1987年結婚をしました。キリスト教を信じていなかった家族との間で、一人寂しかった私にとって妻は神様からの祝福のように感じられました。私は幸せな家庭を与えてくださった神様に感謝しました。
1989年安養に引っ越してきて、近くにあった「恵と真理教会」の夜明けの祈祷会に出るようになり、1991年からは恵と真理教会の日曜礼拝にも通うようになりました。私たち夫婦は恵と真理教会の聖徒になり、神様の意を持って働く牧師様にも出会うことができました。
1997年のことでした。分譲マンションを購入し住んでいた私たち家族は、IMFにより事業が傾いてしまい、借金を返すためにマンションを売って出て行くしかない状況に追い込まれました。そして、賃貸で家を見つけ引っ越しをしましたが、引越して間もない時、大家さんが賃貸金の値上げを要求してきました。とても払える金額ではなかったため、またも引越しをしなければなりませんでした。そんな中、運良く古いアパートを見つけ出し、綺麗に修理をして引越しをしました。ところが、1年が経った頃、アパートの再建築が決まったということで引越しを強いられました。あいにく自分の事業場の方も様々な事情により競売処分される状況になっているところでした。事業場、住処の問題両方とも袋小路に追い込まれてしまいました。弱り目に祟り目とはこのことでしょうか。なんと再建築を担当していた建設会社が不渡りを起こし、会社が変更になったため、建築費用が大幅に増えてしまい、移住費用の支給も難しい状況になってしまったのです。それこそ紅海を前にしたイスラエルの民のような心持ちでした。しかし、再建築が始まった年の送旧迎新礼拝を通じて神様は私に勇気を与えてくださいました。
「主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい」という出エジプト記14章14節の御言葉に私は慰められ、自分の力ではとても乗り切ることのできない状況に耐えられる力を与えてくださいました。私たち家族は黙々と礼拝を中心とした生活を送り、日曜日には奉仕をしながら、このような苦難の期間を過ごしました。そして、苦難の中でも神様が与えてくださる平安と安らぎ、喜びを感じることができました。
紆余曲折の末に再建築アパートは完成しましたが、私たちは入居する状況ではなかったのです。しかし、驚きの出来事が起こりました。
「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」というローマ書8章28節の御言葉が私たちの生活の中で実現されたのです。約8年間に渡って続いた訴訟問題が解決し、私たち家族も再建築アパートに入居することができました。神様は既に心に平安を与えてくださった上、さらに、一番適切な時期に問題を解決してくださいました。
苦難を有益に変え、か弱い自分の信仰心を強くしてくださり、ありがとうございます。
「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである。」（マタイによる福音書4：4）の御言葉の意味を諭してくださった神様に全ての栄光をお返しいたします。神様の前に立つあの日まで「まず神の国と神の義を求めながら」神様に喜ばれるように頑張って生きていきます。

［信仰コラム］　悔悟とは何か。

「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。（ルカによる福音書5：32）」

人のコミュニケーションに何より重要なのは文字や言葉の概念を正確に把握することです。例えば、会話や討論をする時、主題に該当する言葉についてそれぞれ違う概念を持っているとしたら、互いに的外れなやり取りで終わってしまうでしょう。何より大事なのは救援に関する信仰的用語の概念を把握することなのです。ここで、見落としてはならないのはキリスト教の信仰に関連した用語は聖書を通じてその真の意味を理解し、信じなければならないということです。今回は「悔悟」という聖書の用語について考えてみましょう。悔悟には二つの種類があります。
その一つは、不信者に要求される悔悟です。聖書で語っている救援の核心は天国です。天国に行くためには義と認められ、永遠の命を与えられなければなりません。そのためには必ず悔悟が必要です。福音を信じることこそが悔悟なのです。イエスキリストこそ福音なのです。私たちの罪を背負って十字架にかけられ、また復活なさったイエスキリストを信じ、受け入れることが罪を許される悔悟であり、永遠の命を得ることのできる悔悟です。
辞書的に悔悟は「自分のした過ちを認めて悔い改める」という意味です。しかし、辞書的意味のように自己省察を通じて反省し、悔い改めることだけでは、神様に救われることはできません。イスカリオテのユダはイエス様を祭司長たちに売り渡した後、大変後悔した挙句、首を吊って自殺しました。これは悔悟ではありません。 一方、ペトロは残酷な審問を受けているイエス様のことを3回も知らないと否認してから、そのことを後悔し自責しました。しかし、ペトロは復活されたイエス様が現れた時、 イエス様の前に出て行きました。イエス様の許しと愛を受け入れ、イエス様に愛を告白しました。これこそが悔悟なのです。
イエス様と共に十字架につけられた二人の強盗中一人はイエス様を信じ、心に受け入れました。これが救援に至る悔悟なのです。悔悟する姿より感動的で美しいものはありません。
二つ目は、信者に要求される悔悟です。これは救われるための悔悟ではなく、救われた人になったためする悔悟なのです。聖徒が一生行う悔悟です。聖徒はこの世の中のことを何の分別もなく行った事を悔悟しなければなりません。また、「光の実」がないことを悔悟しなければなりません。光の実は全て義と真実の中にあります。さらに、年月を無駄にしていることを悔悟しなければなりません。この世で生きている期間は神様のために働く機会なのです。神様の意を持って生きてないことを悔悟しなければなりません。神様は次のように仰っています。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて、感謝しなさい。（テサロニケ人への第一の手紙5：16）」聖徒でありながら何の喜びもなく、お祈りもしない、全てのことについて感謝もしないのなら悔悟をするべきなのです。
神様を信じない人たちが救われるために必ずすべき悔悟はイエスキリストこそ救世主であることを信じ、心に受け入れることです。そして、私たちがこの世で生きていく間はいつも心と行動が一致せず後悔することがあるはずです。私たちは聖霊様に助けを請い、聖徒のあるべき姿のために努力しなければなりません。いつも自分自身を省み、キリスト教徒らしくない心持ちと生活態度を悔い改めることにより、信仰生活の向上と進歩を成し遂げましょう。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

新約聖書テモデ後の4章にある御言葉をみると使徒パウロがテモデに送った手紙へ次のように記されています。
『私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに來ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。あなたは、何とかして、早く私のところに來てください。デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまい、また、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマテヤに行ったからです。ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに來てください。彼は私の務めのために役に立つからです。私はテキコをエペソに遣わしました。』（テモデ後４；６−１２）
これを見ると一生の間、信仰の道のりを走って来たバウロの姿、途中で信仰を捨て世に帰ったデマスに関する心を痛む話、変わらぬ信仰の道から力走するテトス、クレスケンス、テキコ、マルコの名を接っします。
なぜ、ある人は一生相変わらずキリストを信じる信仰の中で生きて、ある人はキリストを離れ世間に帰ってしまうのでしょうか。他に言わば私たちがどのようにすればパウロ使徒のように最後まで勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通すことが出来るでしょうか。この時間、このような質問に対する答えを取り調べます。

先に、キリストを立ち去るようになる理由を調べて見ます。

第一、聖書に啓示された通りにイエス様へ対する信仰を持たないわけです。
イエス様を宗教の創始者の一人で分かって宗教生活をする人は、真実なクリスチャンではありません。こんな人はいつかはキリスト教に対する興味を失うとか嫌気を感じる日が来ます。そして他の宗教で改宗してしまう人がいます。始めから宗教生活をあきらめてしまう人もいます。

第二、信仰生活の一番重要な目的を修養を積んで、精神安定を得るためのことで思うからです。
こんな人はどの位の歳月が経てばそれなりに修練を積んだと自慢して、今はこれ位ならば良かったと思う日が来ます。教会活動に深く参加しながら否定的な面を見るようになります。教役者あるいは信者たちによって不満が積もって傷心に固まると教会へ通うのが修養するのにむしろ障害になると思い始めます。結局には教会を背いて、イエスを信じるのが邪魔になると扱ってしまいます。

第三、世の中ですることが上手くなって富裕になるための目的で信仰生活をするからです。
概して不信者が教会で出て来るようになる初歩はこんな目的です。それが少しも変な事ではないです。
ところで教会に通いながらも“イエス様だけが救い主だ”という事実を分からなければ自分が願って期待したことが叶えなければ信仰を捨てます。あるいは異端の誘惑に陥ります。
そして、悪人の亨通を見れば懐疑に陥り落胆して信仰を捨てるようになります。それに信仰生活による迫害や苦難が与えてくると耐えなく信仰の道から去って行きます。

第四，人を見て信仰生活をするからです。
ある特定人、あるいは特定身分の人を見て信仰生活をする人は、その対象から失望になる場合があれば信仰生活に懐疑を感じるとか幻滅を感じるようになります。そして信仰生活をあきらめます。それでは、私たちがどのようにすると走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通すことができるかに対して調べて見ます。
初め、永遠の命を得るのが信仰を持つ理由の中で重要な理由にならなければなりません。
ヨハネ福音６章の言葉を見ればイエス様が我々にくださると言うのが永遠の命である事実を直接強調して語りました。
イエスはご自分が天から降って来たパンであると言って**『これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。』**（ヨハネ６：５８）とおっしゃいました。
それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。そこから人々はイエスを去って行きました。イエスを従った多くの弟子たちが去って行きましたが十二人の弟子は残りました。そこで、イエスは十二人に、『あなたがたも離れて行きたいか』と問いました。シモン.ペトロが答えた。『主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます』と答えました。
イエス様から永遠の命を得ようとしないで他の何を捜す人は偽善的な教人で、何かの言い訳を設けて世間に帰る機会を作りキリストを離れ去って世の生活に帰ってしまいます。
しかし、キリスト.イエスから永遠の命のパンを発見してこれを食べた人々は、他の物に決して誘惑されないです。

第二、信仰の究極的目的は神を愛して仕えることにあります。

出エジプト記21章によると永久までその主人を仕えようとするヘブライ人の奴隷に関する制度が記録されています。このヘブライ人の奴隷に関する制度は神様を仕える生の決断に対して教訓を与えます。
『あなたがヘブライ人である奴隷を買うならば、彼は六年間奴隷として働かねばならないが、七年目には無償で自由の身となることができる。もし、彼が独身で来た場合は、独身で去らねばならない。もし、彼が妻帯者であった場合は、その妻も共に去ることができる。もし、主人が彼に妻を与えて、その妻が彼との間に息子あるいは娘を産んだ場合は、その妻と子供は主人に属し、彼は独身で去らねばならない。もし、その奴隷が、「わたしは主人と妻子とを愛しており、自由の身になる意志はありません」と明言する場合は、主人は彼を神のもとに連れて行く。入り口もしくは入り口の柱のところに連れて行き、彼の耳を錐で刺し通すならば、彼を生涯、奴隷とすることができる。』（出２１：2−６）
彼の耳を錐で刺し通してご主人のため一生を奴隷として仕える決断をするヘブライ人の奴隷は何んのためでしょうか。
主人の配慮で得るようになった妻子を愛するようになったからです。
真実の信者も彼のようです。数年間イエス様を信じれば主の愛と恵みにすっかりはまって主を愛する心を持つようになります。
主と結ばれて聖徒が交わる喜び、福音伝導のやりがい、賛美と祈りの能力、聖徒を仕えて奉事する価値を分かるようになればこれを非常に貴重に思う心が生ずるようになります。
聖徒はキリストの奴隷ですが主様の奴隷と言うのは実に驚くべきで光栄の身分です。神様の子で天国の企業を受けられる相続者の身分です。王のような祭司長です。
多年間主様を仕えていながら世に帰る機会が来ると世の去って行く人は、本当に愚かで憐れむ人々です。
こんな人は神様の至極な恵みと愛に比べれば信者に与えられた義務と犠牲は非常に小さなことだと悟らない愚かな者です。
キリストの奴隷でなければ魔鬼の奴隷になることを悟らない者です。
主人を永久に仕えるのを願えばご主人がその奴隷を裁判長に連れて行って確証したご、彼の耳を錐で刺し通して表示をするように私たち主.イエス様も彼と同じように私たちを取り扱ってくださる。
『わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。』と約束しました。聖霊で証印を押して聖霊で充満させてくださいます。

第三、天国に入るのが信仰を持つ理由の中で重大な理由にならなければなりません。

アブラハムは神様の語りに従ってガナン地に来て大金持ちになりましたが、彼が出たガルデアウルに帰らなかった。帰ろうとすれば機会はいつでもありましたが帰らなかった。アブラハムとイサクとヤゴブは天幕の家に暮しました。この地は永遠に居られる都がないし彼らが天国を向けて進む旅人で行人というのを現わすためでした。狼狽と失望にあってイエスに出て来た後、健康を得て生活が富裕になって社会的に安定した地位を得るようになれば、これからは目的をすべて果たしたと思って帰る機会がこの時だとして世の中に帰る人がいます。
皆さんはこの地でしばらく通り過ぎる旅人に勤めることを思いながら天国の望みで充満して生きて行ってください。こんな聖徒は主様を去って世の中に行くことが決してないです。
家庭や職場からまた、社会団体や交わり会で自分に与えられた責任と義務を誠実に行い住みますが、心は常に天国へ置いて生きる皆さんになって下さい。このような人は世のすべての物を与えても天国へ行く信仰とは取り換えしません。

第四、ただイエス様だけを見つめて進まなければなりません。

イエス様が指示することに充実しようと思わないで、他人あるいは多くの人々がどんなに処身するのかを見回していれば、誤れた神学思潮を従うようになって混雑された教理を受け入れる危険があります。
私たちが肉身を着てこの地に住む間は奸巧で悪賢い悪魔の誘惑は続きます。
私たちの信仰はいつも聖書に根付けなければなりません。御言葉の中におられるイエスキリストをいつも仰いで従う生活ができるように願います。
イエス様を仰いで従うことに焦点を合わせなければなりません。このように行う聖徒は信仰の道から去って行きません。
人は年を取ってますます過ぎ去った日を回想することが多くなります。そうするしかないのは過ぎ去った歳月ほど積った事情も多いからです。そしてまた一つは死に対して考える時間が多くなるからです。
愛する皆さん、永遠の命を得て天国に入れるのを一番尊いことを分って、神を仕えるのが最高の目的で、イエス様を敬い従う生に焦点を合わせて生きるように願います。それから、『走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通した。今後は私のため義の冠が予備されてある』と告白出来ることを願い求めます。アーメン